チステルニーノの外部空間におけるコミュニケーションの発生状況に対する一考察
ーソーシャルメディア上のスナップ写真からの判読による分析ー

建築・都市アメニティグループ
B10C018　　北山　絵梨奈

チステルニーノ　　コミュニケーション　　路地
個体距離　　ソーシャルメディア

1.はじめに

日本では、大正 9 年に市街地建築物法が制定され、準防火のために木造の外壁が薄い不燃材でカバーされる制度が強制力をもって交付されることとなった。それにより木造が中心であった日本の建物の表情が一変し、モルタルと新素材が混合する違和感ある住宅地となった。また、戦後の高度経済成長期の都市化によって建物の増改築や建物と建物との間に設備が置かれる例が増加し、かつて住民にとって不可欠なコミュニケーションの場であった路地等が減少する傾向にある。

これらは防火や増改築に見られるように、経済性や機能性を重視しており、美しさ、住民の精神的豊かさを考慮に入れていなかったために生まれた結果であると言える。このことから、歴史や自然条件、住民の生活等の周辺環境といった都市的文脈も合わせて外部空間のデザインを考慮することが必要であると考える。

ヴァナキュラーな共同体建築は上記のような経済性、機能性ではなく、都市的文脈を最も重要視したものと考えた。ピエトロ・ベルスキはヴァナキュラーな共同体建築を定義し、「2、3 の知識人や専門家によってではなく、伝統を共有し、経験の共同性に基づいて働く、全住民の自発的継続的な作業によって生み出された協同芸術である」と述べている。[1)]本研修では、このヴァナキュラーな共同体建築の外部空間におけるコミュニケーションの発生状況の把握を考察する。

2. 調査概要

対象はイタリア共和国(Repubblica Italiana)プーリア州(Puglia)チステルニーノ(Cisternino)の囲郭内旧市街地とする。チステルニーノはアドリア海から海抜 350m 程の丘陵地上にある。城壁の中には白く塗られた住居群が迷路状の道により高密に組織されており、人口は旧市街地で 3000 人、市全体で 11000 人の小都市である。町の起源は 8 世紀頃であり、町の構造は 15 世紀に完成したとされている。囲郭都市であるため周囲にスプロールせずに密な都市が形成されており、都市計画による交通整備等の影響を受けておらず、比較的建物と建物の間の路地空間が維持されている（図 1)。

研究方法として、人々のコミュニケーションの発生状況を把握するため、ソーシャルメディア上のスナップ写真を分析する。これはスナップ写真が人々のアクティビティを最も自然な形としてとらえていると考えるためである。収集した写真や出自にある記述から位置情報、空間構成要素、属性（撮影時間、季節)、社会距離[(1)]を推定する。その情報を基に空間構成要素と社会距離の関係を計量し、コミュニケーションの発生に有効な空間構成を考察する。

図 1　チステルニーノ旧市街地図

3. 調査結果の考察

3.1 個体距離の判読

以下にチステルニーノのコミュニケーションの発生状況をまとめた（表 1 と図 2)。路地において、最も多かったのは 2 人間の密接距離で、続いて多かったのは 2 人間の個体距離であった。一方広場において、最も多かったのは 2 人間の個体距離で、続いて多かったのは 2 人間の個体距離であった。

また人々の行動としては、路地[(2)]、広場両方において、「歩く」が最も多かった。続いて多かったのは路地において「立ち止まる、会話する」「座る、食べる、会話する」で、広場において「食べる、座る」であった。

表 1　路地と広場における社会距離の分類と発生件数 [2)]

社会距離		2	3	4	5
路地 (28 件)	密接距離	9	1	0	0
	個体距離	5	2	3	1
広場 (32 件)	密接距離	14	1	0	0
	個体距離	19	15	7	2
	社会距離	2	6	1	0

※密接距離0～45cm、個体距離0.45～1.30m、社会距離1.30～3.75m、公共距離3.75m以上である。路地について社会距離、公共距離、広場について公共距離は本調査において確認されなかったため省略した。

Consideration on communicational activities in external space in Cisternino　　Erina Kitayama
Case study on using snaps in social media

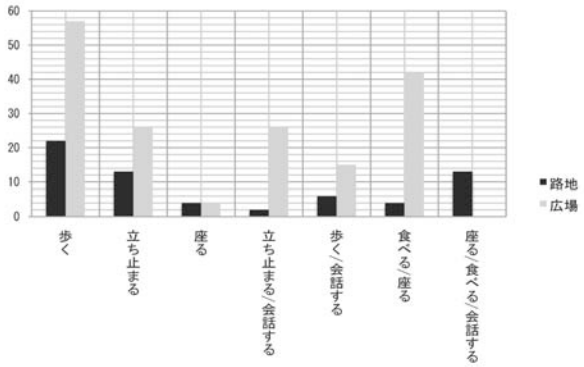

図 2　路地と広場における行動種類

3.2 場所による比較

収集した資料より路地の空間構成要素としては形態的要素としてトンネル、袋小路を抽出した。これら中でトンネルは行動として比較的「歩く」が多く、「座る」が少なかった。これはトンネル内が暗いことと、景色を楽しむことが出来ないためと考えられる。このことからトンネルは単に通行の場所として機能していると考えられる。

次に「立ち止まる、会話する」がトンネル出入り口付近で多く発生していた。個体距離でのコミュニケーションが最も多いことから、この空間はコミュニケーションの場として良い空間であると考えられる。

袋小路は「立ち止まる、会話する」が多く、「歩く」が少なかった。これは袋小路が 3 面塞がれていることと袋小路を形成する建物群は住宅が多いことからそこに滞留が生まれ、会話が発生するためと考えられる。個体距離が最も多いことからも人々の良いコミュニケーションの場として機能していることがわかる。

一方広場は「歩く」が多く、次に「食べる、座る」が多かった。これは広場内に設置されているパラソル内で食事をする人が多かったためと考えられる。個体距離でのコミュニケーションには食事中の人と店員との会話も多く含まれている。

3.3 時刻による比較

路地について分析する。夜は昼と比較して外部空間でのアクティビティが少ない結果となった。特に「歩く」は１人の場合も含めているため、1 人で外に出歩く人が少ないということが結果に影響していると考えられる。同様に、「立ち止まる」「歩く、会話する」が少なかった。これは、夜間は特に人通りも少なく、視界が制限されることにより立ち止まることを誘発するような視覚刺激が少ないためであると考えられる。

同様に広場も「歩く」は昼より夜の方が少ない結果となった。同じく 1 人で出歩くことが少ないためと考えられる。また「座る、会話する」が次に少なかった。これより路地での分析を含め、夜は昼よりもコミュニケーションが減少する傾向にあることがわかる。

しかし、「立ち止まる、会話する」は昼より夜の方が多かった。これは「座る、会話する」は夜に減少していることから、夏の暑い昼の時間帯は日陰があるパラソル内でコミュニケーションが発生しているのに対し、夜の時間帯は比較的涼しいため、他の広場内の外部空間でコミュニケーションが発生していると考えられる。

3.4 季節による比較

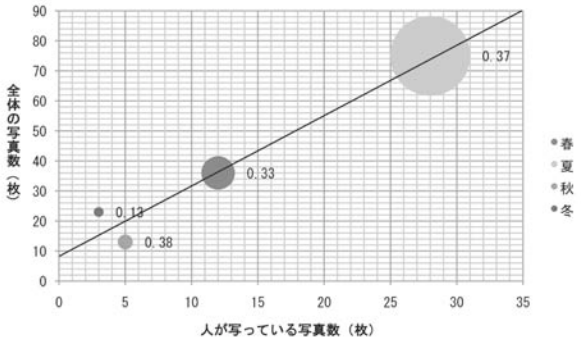

図 3　季節別にみた写真数の関係とアクティビティ発生数

※円の大きさはアクティビティの多さ、円の右下の数値は全体の写真数を人が写っている写真数で除したものを表している。

※全体の写真数は都市の空間構成がわかるものを対象とする。

全体の写真数に対する人が写っている写真数の割合は秋に大きく、冬に小さかった（図 3）。この割合は人々の間での魅力あるコミュニケーションの発生件数に関係していると考えられる。またアクティビティは夏が多く、冬は少なかった。冬と夏は全体の写真数が結果に大きく影響していると考えられる。

秋は全体の写真数に対する人が写っている写真数の割合が、写真数が多い夏と同程度だが、アクティビティが少ない。これは住民間で魅力あるコミュニケーションが発生しているが観光客数が少ないためと考えられる。

4. まとめ

チステルニーノの外部空間でのコミュニケーションについて場所や属性による特徴や変化の傾向を明らかにした。しかし他者の写真から得た情報だけでは階段やバルコニー等の建築的な要素の効果についてまでは確認することができなかった。そのため将来的には現地に行って自ら観察したい。後期は得られた知見を卒業設計に活かすことを目指す。

【注釈】

(1) 文献2 より、社会距離とは人間のコミュニケーションのふれあいの距離を表し、ふれあいの強い順に密接距離、個体距離、社会距離、公共距離となり、会話のきっかけが生まれやすいものは個体距離である。本研修では個体距離が発生している場所が、コミュニケーションが最も良い状態であると定義する。

(2) 本研修での路地は幅員 4 メートル以下のものを指すが、チステルニーノでは道路の幅員が 4 メートル以下のものが多いため、チステルニーノの道路を路地と呼ぶ。

【参考文献】

1) B. ルドフスキー著　渡辺武信訳：建築家なしの建築－, 鹿島出版会, 1984. 1
2) J. ゲール著　北原理雄訳：屋外空間の生活とデザイン－, 鹿島出版会, 1990. 3
3) 村田まどか：丘上都市チステルニーノの旧街区における街路空間の研究；日本建築学大会学術講演梗概集

秋田県立大学　システム科学技術学部
建築環境システム学科　建築・都市アメニティグループ
Urban and Architectural Planning Lab. Dept.of Architecture and Environment Systems. Faculty of Systems science and technology, Akita Pref.Univ.